

宇野「経済政策論」研究会記録について

戸原 つね子

カレントな研究発表の場である本誌に、半世紀も前に行われた討論会の記録掲載を許された理由には、それが研究史の資料としての意味を持つことも含まれているといえよう。本記録のそうした意味を裏付けるためにも、これを見出した事情や、ワープロ化の過程で生じた問題、また同研究会の参加者で速記録コピーの保持者であった故・戸原四郎のノートから知りえた研究会の成り立ち等について、関係者の要請もあり、以下に述べてみたい。

1. 資料の原形態

本記録の元原稿（以下、元稿と記す）は、戸原が東京大学社会科学研究所を定年退官した際（1990年）、自宅庭に建てたバラックながら2階建ての書庫——これは生前、独・瑞・仏・英等の専門書で満たされていたが、死去（2004年）の翌年、その主要部分が大學図書館等に大量寄贈され、空棚が多くなっていた——の一隅にかなり目立つ形で置かれていた。ちょうど500頁まで番号を振った縦書き200字の原稿用紙（東京大学出版会のもの）に手書きしたものを、2枚ずつ横に並べB4でコピーしたもので、相当な分量である。本文には見出しも目次も無いが、「経済政策論について」という表題と「昭和三十三年七月十二日 主催 東京大学出版会 場所 東大学士会館」の脇書きを配した表紙（これは「東京速記株式会社」の用紙）がついていた。その本文は、訂正の記入がし易いように1行おきに書かれ（故に全体で約5万字）、事実、多くの書き入れがあり、コピーが余り鮮明でない部分もあって、読み易くするには清書の必要あることがまず感じられた。この本文といっしょに、戸原が横書きレポート用紙8枚に全体を整理・要約したのも置かれていた。これは冒頭に出席者氏名を発言順に記し、以下、各発言の要点を記したもので、左余白には——彼の読書ノートのどれもがそうであるように——元稿の当該頁番号が詳しく記入されていた。これは、後の清書過程でも大変役立ったが、この古びたコピーの束が、捨ててはならない重

要な資料らしいことを、私に予感させた。

これらを初めて見たのは、上記の蔵書寄贈を終えた2005年の秋だったと思うが、しばらくは放置していた。当時の私にはまだ、他の遺稿整理の仕事があったし、戸原の書簡や講義録により強く惹かれていた。そして本記録の存在を、人に語る機会もなく過ぎていたが、初めて話したのは2006年秋、戸原と共通のゼミの先輩である日高普先生が亡くなられ、葬儀に伺ったときのことである。たまたま戸原ゼミの一人、小湊繁先生と帰途が一緒になり、車中での立ち話になった。同先生は、宇野「経済政策論」はいまだにしばしば論議的になるものだから、ワープロ化が望ましいと勧められた。それでもなおしばらく、私は他の雑事にかまけていて、これに取り組み始めたのは翌2007年の夏も過ぎるころである。

2. 清書過程での問題と解決

速記録を詳細にみると、当初から問題が多かった。たとえば、①速記者による草稿がしばしばそうであるように、同音異義の日本語に誤字(例、「工場」→「向上」)が多いこと。これは戸原の全体にわたる鉛筆書きの校正でかなり解決されていたが、これが無ければ意味の通じないところが少なくなかった。②とくに宇野先生の話に多く出てくる外国語を速記者が十分聞き取れず、意味不明の単語がいくつかカナ書きで残されていること。③また各人の発言にも、座談の気安さからか表現が不完全で必ずしも筋の通らないくだりが含まれていること、などである。訂正書き込みの多いことは前述したが、これが全体にわたっているなら、これらの難点は一応解決されているはずであるが、残念ながらそれは、出席者14人中、8人の発言分にとどまっており、肝心の宇野先生を含む他の6人の発言には、戸原の上記の校正以外には、書き込みが無い。訂正の書き入れは、8種類の異なる字体からなり、これは8人の出席者がそれぞれ自分の発言について訂正を入れ、次に回していったことを示している。戸原は、少なくとも8番目にこれを受け取り(彼より前に訂正の必要なく回した人がいたとすれば順番はより後ずれするが)、自分の分に訂正を入れた後、全体をコピーして現物は次に回し、手元に残したコピーに鉛筆で、全体にわたる校正や上部余白のいくつかの見出し(これはそのままワープロ稿に生かした)、意味不明の単語や行に対する傍線と?マークを、書き入れていった形になっている。

後になって分かったことだが、この記録は、宇野先生が亡くなられた際、その手元に東大出版会の石井和夫さんが見た「風呂敷き包み」の速記録¹⁾(おそらくほぼ全員の訂正記入済み)

1) 馬場「解説」にも引用されている雑誌『経済学批判』1977年9月、167頁、左から3行目。

と、ここに取り上げているコピー（元稿）の2つしか存在しないようである。この事実と、上記のような元稿の状態から斟酌すると、その作成過程は次のようなものだったといえよう（研究会自体の成り立ちについては後述）。当研究会の実質的演出者だった武田先生が、後の執筆のための資料として、研究会の速記をとることを東大出版会に依頼され、速記者が一部作った原稿は出版会を経て武田先生に渡され、同先生は全体にわたる修正・加筆の必要を感じて、まず自分の発言についてそれをされ、各人がそれをするよう指示して出席者に回覧された。各人の手を経た記録の現物は最後に宇野先生に届けられ、先生はこれを亡くなる時まで大切に手元に置かれていた、ということである。戸原の分以外にコピーが存在しないことについては、当時のコピー機はまだ余り便利でなく500枚もとるのはかなり面倒だったことや、全員の手入りが済むまでは上記のように不完全な原稿だったこと、などが考えられる。このため多くの方はメモを取る程度で次に回されたのであろう。

いずれにしても、私がワープロ化にとりかかった元稿の半分余は、発言者本人の校閲を経ていなかったものであり、戸原が疑問符をつけたままにしている箇所が少なくないことは、清書の作業をししばし中断させた。また私としては内容の把握が主目的になって、誰かに見せる当てが無かったことも、作業を遅々とさせた。しかしその秋（2007年）も終わるころ、宇野没後30年研究集会参加のため上京された加来祥男先生が、戸原没後3年になる拙宅を訪ねてくださり、元稿をお見せしたりしたことは1つの転機になった。この訪問で集会開催のことを知った私は、その後インターネットで同研究集会の内容を見、そこで馬場先生がアメリカ経済について報告されているのを知った。同先生は、戸原の死後も私宛に抜き刷りをお送りくださる関係から、私は2008年賀状の端に、本記録のこと、そこで宇野先生がアメリカ経済について意外に詳しく話されていることを書いた。こうしたことから私のワープロ稿は、疑問点含みでもよいから仕上げて、2~3の先生にお見せすることになり、同年1月にはいちおう打ち終えた。これらの先生の読後感想は、発表の価値ある内容ということであり、ともかく本研究会の出席・発言者で連絡できる4人の先生にみていただくことにした。

4人の先生方は、みなこの記録の復刻を喜んでくださり、意味不明語として残されていた数個のカナ書き単語のほぼすべては、これらの先生方の推察で解決されることになった。それらを例示すれば、次のようになる。

元稿の表現	解決後	発言者	存在箇所	推定された先生
ワスタント	→ トラスト運動	宇野先生	元稿 p 42(本誌 p 151.左.上)	徳永 重良
マルカトー	→ マーチャント・バンカー	〃	〃 p 106(〃 p 154.右.下)	〃
タンブレット	→ トラスト・ムーヴメント	〃	〃 p 364(〃 p 169.右.下)	森 恒夫

ダウンチバー → アンチ・パウパー	〃	〃	p 408(〃 p 172.右.下)	徳永重良
ダイジシジョウ → 第二次市場	〃	〃	p 483(〃 p 177.左.下)	石崎昭彦

注) ()内は本誌のページ数, 「右・左」は欄, 「上・下」は欄のうち上半分か下半分かを示す。

これをみれば、速記の元稿にはいかに難解なカナ書き語が含まれ、その判読には、出席者ならではの知恵と熟考が必要とされたかを、窺うことができよう。また上記4人中のお一人・徳永先生はいち早く本誌への掲載を提案して下さり、これは馬場先生を經由して、本稿発表の機会を開くこととなった。そのほか、戸原ゼミの加来、藤澤利治先生は私のワープロ稿を読んで、いくつかのミス打ちを指摘して下さり、こうした多くの方々の協力のおかげで、発表しうる記録が出来上がっていったわけである。

3. 当研究会の成り立ち等

速記の対象となった研究会の成り立ちについては、すでに馬場先生が「解説」でふれられているが、さらに当時の戸原の手帳等によって補足すれば、次のようなことになる。1957年、宇野先生が還暦を迎えられ、それを機として同先生の学説を体系化する叢書(「経済学大系」)の刊行が東大出版会を軸に企画された²⁾。そのなかで段階論については、遠藤、武田先生を編者とする「帝国主義論」2巻が予定され、58年半ばからその準備が始められた。すなわち両先生と主要参加者による第1回の打ち合わせが、6月6日東大出版会会議室で行われた。2回目(同28日)には若干メンバーを増やして「帝国主義研究会」が発足することとなり、まず研究の土台となる宇野『経済政策論』第三編を掘り下げて検討すること、そのために次回は著者を招いて質問し、討論することが決められた。その実行が、3回目の会となる本記録の研究会であり、このことは本稿の冒頭にある遠藤先生の発言にも述べられている。

その後、この「帝国主義研究会」は、同年9月から翌59年7月末にかけて毎月1~2回のペースで十数回も行われており、その早い段階でドイツ編、イギリス編で巻を分けることや執筆分担が決められ、各人の報告に進んでいったと思われる。この7月末でアメリカを含むドイツ編の報告はいったん終わり、イギリス編については、若干メンバーを補充して翌60年3月から研究会が再開され、同年7月にかけてさらに7~8回も研究会が重ねられた。これらの成果が『帝国主義論』上・下(61, 65年)にまとめられたことはいうまで

2) 前掲雑誌、同頁下段、および戸原の手帳による。

もない。

私の報告はこれで尽きるが、なお感想を一つ付け加えよう。全くの門外漢である私がこの仕事に関係して印象付けられたのは、宇野先生がご自身では十分に果たせなかったと思われる現代資本主義研究や現状分析の仕事について、後輩に期待された思いの強さである。確かに書かれたものとしては、この分野より原論や方法論に関するものの方が圧倒的に多いようであるが、話された面では、前者の関係は後者のそれに勝るとも劣らないほど、多かったのではないだろうか。周知のように、先生の戦前の本職は「経済政策論」の講義であり、このため東北大学時代には主要国の産業・金融の実態について研究を深められ、その副産物として多くの特殊講義も持たれたようである³⁾。民間の調査機関に在籍された戦時中は、現状分析がご専門であり、それらを通じて蓄積された実体経済に関する豊富な知識の一端は、本記録でも示されている。また戦後、東大社研におられた期間には、『金融資本論』（段階論）や現状分析の研究会を数多く持たれ、それらを通じて実に多くを語られ教えられた⁴⁾。また、上記の「帝国主義研究会」より10年近くあと、両大戦間期の主要国分析を主目的に組まれた帝国主義研究会（青木書店刊の『講座・帝国主義の研究』編集が目的）にも熱心に参加され、国家独占資本主義などをテーマに自らも報告されたことが、戸原のノートに記録されている。このように現状分析の関係で多くを語られたにもかかわらず、そのわりに書かれたもの、記録されたものが『経済政策論』以外には、大変少ないのも事実であろう。本記録が、そうした欠を僅かでも補うものになりうるなら、幸いです。

3) 宇野弘蔵『資本論五十年(上)』1970年、法政大学出版局、第8章。

4) たとえば戸原四郎「宇野先生、研究会、コーヒー」『宇野弘蔵著作集』第4巻 月報、1974年。